

悲剣肌風 発動編

裸形で覚醒する女人剣



濠門長恭 著

卷之一

登場人物

柴田弥恵

弟と共に父の仇討に赴く。仇討の意義に疑問を持たぬでもないが、武門に生まれた者の宿命と信じている。神崎古流の四番札。得手は小太刀。
なお、父・柴田弥一郎が殺害された経緯は不明。

柴田七郎

仇討の名義人。神崎古流の十六番札と姉には譲るが、それなりに剣術の心得はある。

奎助

柴田弥一郎の信頼篤かった中間。

神崎正安

二

武術百般指南・神崎古流六代目。妻帯せず。
殺気などという「気」は無いと断ずる合理的精神の持ち主。己より強い敵には「正当の奇策」で立ち向かえと弥恵に教える。

藤原数馬

柴田弥一郎を斬殺して隣藩に逃亡し、城下で堂々と剣術道場を開く。神崎古流のずば抜けた一番札。

小島要介

弥恵の許婿。柴田弥一郎斬殺により婚約は解消されたが、弥恵が骸となる前に初物を味わおうとして、弥恵に投げ飛ばされる。

目次

一.	末期の目	四
二.	父と許婿	二十四
三.	神崎古流	四十七
四.	大道芸人	
五.	生胴試し	
六.	芝居狂い	
七.	御前仇討	
八.	卑剣昇格	
	後書き	

一・末期の目

丘を登り詰めると、緑の遠くに一面の紺碧が広がっていた。むせるような草いきれを吹き払う風に、かすかだが潮の香が息づいている。

「これが……海というのですか」

柴田七郎が足を止めて、姉の弥恵を振り返った。十四歳の少年は、誰彼となく感動を分かち合いたいとばかりに頬を紅潮させている。そして絶句していた。

弥恵も弟の斜め後ろで立ち止まり、生まれて初めて見る海の途方も無さに無言で眺めいた。海は視野の端から端まで連綿とつづき、遠くは空へとつながっている。

子細に眺めれば、紺碧の海原には濃淡があり煌めきがあった。ごつごつした岩場に白く砕ける波のあたりの緑がかった細い帯は、すぐに明るい青へ変わり、沖合へ向かうにつれ

て黒味を増していた。さざ波が夏の陽を照り返して金粉さながらに光っている。海が空へ溶け込むあたりに一艘の船が浮かんでいた。白い帆に風をはらんでいるのだが、進んでいるようにはまるで見えない。

「これが海というものですね」

弥恵は弟の言葉を繰り返した。

「目も心も洗われる思いです」

死を覚悟すると、目に映るものすべてが新鮮に、輝いて見えるという。これがそうなのだろうか——とは、口に出さない。

「のどかなもんですが、時化したときは家から眺めるだけで脚が震えます。横波を食らえば千石船でも、ひとたまりもないです」

ふたりから一間半（三メートル）ばかり控えた後ろから、奎助が無遠慮に声を掛けた。

この男は四十五歳と姉弟の三倍ほど年輪を重ねているだけあって世事に明るく、これまでも姉弟の知らない名物料理やら神社仏閣を案内してくれたものだが、それにしても実

感のこもった口ぶりだった。

「でも、海は塩と食べ物を恵んでくれます。ほれ、あそこ……」

弥恵の一步後ろまで近づいて左助が指さしたところ——明るい青色の中に突き出た黒い岩場のまわりに、三艘の小舟が浮かんでいた。

「岩の根に海藻が生えて、それを餌に魚や貝が集まってきます。それを漁っているんです」

小舟には下帯一本に半纏をまとった男がひとりずつ乗っているが、とくに網を打ったり釣り糸を垂れているでもない。とはいえ、油断なく海面を見張っている様は、のんびりと休んでいるふうでもなかった。

果たして。小舟の近くに丸く白いものが浮かんだ。布で包んだ人の頭だった。それが小舟の縁につかまって、何かを舟底へ落とし込んだ。

「海に潜って、じかに漁っているんです」

たいていの地では、潜り漁は女にしかな許されていない。若い衆が寄ってたかつて獲物を

漁れば、すぐに根を枯らしてしまう。その一方で、女のほうが辛抱強く寒さにも強いから、真冬は無理だが春先から秋の終わりまで漁ができる。

奎助の講釈がひと段落したところで七郎がふたりをうながして、腰までもある草を掻き分けながら細い道をくだって行つた。

北国街道を北上して海岸に出てから折り返すより途中から北西へ突つ切つたほうが近いとは奎助の進言だった。たしかに道のりは半分にも縮まつたようだが、良くても村と村をつなぐ細い道、どうかすると杣道を歩く結果となつた。しかも、村々に小さな寺があり神社もある。仇討の旅にある姉弟としては、そのまま通り過ぎるわけにもいかない。

七郎は信心を持つ年頃ではないし、弥恵も神仏に頼る心持ちはない。怪力乱神を語らず。それは神崎古流の心得でもあつた。とはいえ。仇討の身としては本懐成就を祈願するべきであるし、一行の素性を知る者がいない地だか

らといって振る舞いを違える小狡さもなかった。

つまり、近道のつもりが逆に日数を食ってしまったのだった。増沢藩の城下からまっすぐに咲川藩を目指すなら、険しい山道を北西へ進む方法もあった。道のりだけを見れば、三分の一ですむ。しかし山には毒虫も多いし、蝮もひそんでいる。山中に茶屋のあらうはずがないし、湧き水に中れば腹をくだすだけでは済まぬかもしれない。大事を控えてつまらぬことで体調を崩す愚を説き、急がば回れと街道沿いを姉弟に勧めた左助にしては、迂闊な判断だった。

いや。進言を採り上げるも否も、長たる者（ここでは七郎）の判断であり決断である。出立のとき、はやる弟を抑えて強く街道沿いの経路を勧めた弥恵だけに、ここに至ってのわずかな近道に懸念は残ったが、左助が言うならばとの安心もあって、重ねての口出しは控えたのだった。

結果として咲川藩への到着は遅れるが、弥恵はそこに不都合を感じていなかった。仇は堂々と城下に居座っている。そして、勝算のない仇討が先延ばしになる……。

海岸沿いの街道を半刻も歩くと、すこし広まった場所に茶屋らしい小屋があつた。

「お婆さん。ここで弁当を使いたいが、かまいませんか」

七郎が慇懃にこつとわつてから、姉弟は並んで縁台に座つた。左助が葛籠つづもから握り飯を出してふたりの横へ置いた。同じ縁台の、七郎をはさんで弥恵とは反対側の端へちよこんと腰をおろしたのが、左助の主人への遠慮であり、別の縁台を使わなかったのが、これから来るかもしれない他の客への気配りだった。

「おかずになりそうなものは、ありませんか？」

七郎の言葉は茶店への気遣いというよりは、おのれの腹具合だった。

「すみませんねえ。朝のは売れてしまったで

す。もうちつと待つてくだされば……ほれ、
樽をすれば」

老婆が海の一点を見つめてから、やおら大きく手を振った。

「うん……？」

七郎も弥恵も、こちらへ漕ぎ寄せてくる小舟は見えていたが、それが茶店と関係があるとは思つてもいなかった。

「婆さん。歳のわりに目が達者だね」

「目と口だけはの。海は孫娘たちに譲ったわ
い」

中間の奎助ちゅうげんに対しては、老婆も気さくに応じている。

見ているうちにも小舟は矢のような迅さで近づいてきて砂浜にどし上げた。若い娘がふたり、籠をかかえて駆け寄ってくる。

「お客さんの姿が見えたんで、大急ぎで戻つたんよ」

籠は大小の魚貝類でいっぱいだった。それを茶屋の脇の小さな生簀へ移して。

「選り取り見取りだで。言うてくれたら、じきに焼きますじゃ」

三人とも品定めどころではなかった。茶屋の奥で団子をばくついているふたりの海女に、海千山千の奎助でさえ、目をみはっていた。

見事に灼けた赤銅色の肌――が、丸見えなのだ。女だてらに下帯を締め込んで、『とみはま』と染め抜いた短い法被を羽織って。それだけだった。帯すらも締めていない。姉妹なのだろう。弥恵よりもひとまわりは小柄な娘は乳房も膨らみかけで尻にも硬さが残っている。姉のほうは、その正反対。たわなに実った乳房と、豊かに張った腰。そういったすべてが三人の目の前に晒されていた。

（綺麗……）

神崎古流の切り紙を許されている弥恵は、姉妹の肉体に均整のとれた力強さとしなやかさを見ていた。人通りのある道端で年頃の娘が真昼間から半裸を晒していることには、姉妹の態度があまりにおおらかなのだ

ろうか、卑猥さも嫌悪も感じなかった。

もつとも、仇討のために元服を繰り上げた七郎のほうは、そもいかないうだった。袴の前が異様に盛り上がっているのに気づいて、弥恵は眉をひそめた。

「お侍さん。どれにしますかい？」

「小魚を適当に。それと、鮑があれば……」

七郎の頭には、三年前に隣家の祝い事でお裾分けにあずかった熨斗鮑の煮物があつた。干物にしてあれほどに美味しいものなら、採れたては如何ほどのものか。

七郎は歳のわりに大柄だから、年齢を見誤られたのかもしれない。海女の姉のほうが、くすつと笑ってから。

「まだ海仕事があるけ、今日のところは生簀の鮑で堪忍してください」

妹が、きやあと法被の襟に顔をうずめた。

奎助もにやにやしている。女性器を鮑にたとえることなど弥恵も七郎も知らなかったし、まして、娘がわざわざ『今日』と言った裏に

暗示された意味に気づくはずもなかった。

「こら。若い娘さんの前で、戯れ口はたいがいにせんかい」

老婆にたしなめられて、姉妹はきよんとした。それから、弥恵の姿をしげしげと眺める。男物の薄羽織に仕舞袴、刀袋に収めた大刀を肩に背負い腰には大脇差を帯びているが、もとどりを高く結んだ『根取』は女の髪型だった。現代風にいえば、ロングポニーテール。

女髷に結っていないから、激しい動きで不意にほどけて視界を妨げられるおそれがない。

「あれま……失礼しましたです。勘弁してくださいだされ」

姉がぺこんと頭を下げてから、また漁場へ戻ると言い置いて小走りに浜へ向かった。赤銅色の双丘が鞠のように弾んでいる。妹のほうは、まだくすくす笑いながら姉を追って、ほっそりした両脚が男の子のように跳ねている。

あらためて弥恵が三人分の菜を（もちろん

鮑も三つ）見繕って。新鮮な魚貝が直火に焼かれる香ばしい匂いに空腹をたつぷりつらせてから、一行は持参した握り飯の包を開いたのだった。

文字どおりの裸一貫で日々の糧を漁り、旅人に海の幸を供して日銭を稼ぐ。なんの苦勞もない生活——では、ないにしても。父の無念を晴らしたいという気持ちに偽りは無いとはいえ、武家の打算（仇を討たねば家は絶える）も交えて、勝てる見込みの無い敵の懷へ飛び込んでいく自分たちよりは、よほど自然に生きている。生まれて育ち、食べて寝て、子供を作って育て、老いて死んでゆく。そのどこに、侍の意地が紛れ込む隙があるうか。弥恵は、握り飯が喉につかえる思いだった。

——娘の名は柴田弥恵。十七歳。幼いころ

はとんでもない御伝馬おてんばで、その心根を矯めようと考えた父の命で、六歳の秋に神崎古流に入門させられた。御伝馬を矯めるのに武術を習わせるといふのも奇妙な話だが、弥恵は武

術に熱中して、また師匠の言（武術の心得有る者が無き者をいじめるなど卑怯千万）を守つて日頃の御伝馬は鳴りをひそめたのだから、父の計略は図に当たつたというべきだろう。

弟の七郎は十四歳。仇討の名目人だが、剣の腕は弥恵におよばない。嫡男なのに七郎と名付けられたのは、母の名である七恵の一字を授かつたからだ。

奎助は、十年の余も雇われている中間。父の信は篤く、他者にはまかせられぬ用事を言いつかることもしばしばだったが、およそ武術には縁がない。だからこそ、みずから供を申し出た奎助を、弥恵は即座に許した。いささかでも腕に覚えがあれば助太刀などとしやしやり出て、命を落とすだけだ。死ぬのは二人だけで沢山だと、すでに弥恵は覚悟を決めている。

七郎とて近頃の少年にしては文武に熱心で、四十人を超える神崎古流の門人中、大人に交じつて十六番札を守っていた。その自信が、

四番札の姉と二人掛なら、一番札が相手でも勝機を見出せると信じさせている。

しかし弥恵は、敵の腕を見誤らぬだけの力量をそなえている。二番札の当摩慎三、三番札の野波恒明とともに、弥恵は神崎道場の三羽鳥（人によつては鷹と隼と鶴）に数えられていた。しかし一番札の藤原数馬は、鳥だろうと鶴だろうと齒牙にもかけぬ天狗に擬せられていたのだった。

神崎古流はひとつ剣術の流派ではない。槍と小太刀は言うまでもなく、手裏剣や弓、薙刀や捕縛術まで手の内にある。とはいえ、そのひとつひとつに独自の奥義があるわけではない。たとえば鉄砲術などは、年に一度、高弟だけを引き連れて獵師を訪ね、実際に射撃の経験を積ませはするが、それ以上の修練はしない。戦の場で役に立つほどに鉄砲術を心得ている者は、藩の鉄砲方に勤める土岐能次郎と姫久寿利の二人だけで、神崎正安といえども彼らには及ばない。しかし、すべての武

術に通底する理念が、神崎古流にはあった。

その理念こそが神崎古流の真髓なのであるが、それは措くとして。剣の勝負で、弥恵は一度も藤原数馬に勝った例しが無い。小太刀（相手は大刀）なら五本に一本くらいは相討ちに持ち込めたが、それも剣の技だけだったかどうか。

「肌が触れるほど女人に近寄られると、どうにもかなわん」

藤原の照れくさそうな顔を見ると、当の弥恵も半分は納得してしまう。相手の懐に飛び込んでしまえば、長い得物よりも短い武器に利が移る。あとじさって間合を取りなおそうとすれば、そこに隙が生じる。いっそ組討ちに持ち込めと、神崎古流は教えている。しかし藤原は、一度たりとも弥恵に組み付いたことがないのだった。

弥恵が槍で藤原が剣の場合は、女人の肌が遠いせいなのか、剣と剣とで仕合うよりも簡単に負けてしまう。

得物が長くても短くても敵わない。むざむざと手裏剣を受けるような相手ではないし、たとえ当たっても、よほど急所に撃ち込まないかぎりには戦闘力を奪えない。いっそ最初から組討ちを仕掛ければ……命の遣り取りに、まさか女人の肌もないだろう。

一行は海岸沿いの街道を西へ進み、五日目に咲川藩への分かれ道へ折れた。好奇心旺盛な少年も、箸が転げただけでおかしがる乙女も、仇討の旅を意識して口数は極端に少ない。柰助だけが、このあたりでは雨戸に『へのへのもへじ』の貼り紙をした家への夜這いは許されないとか、佐々成政が愛妾の誰それを見初めたのはあの村だとか、姉弟の気を引き立てるつもりか、頭の中身の虫干しをしている感があった。

北国街道を道中していた折は柰助の説明に興味を示していたふたりだったが、今は短く相槌を打つのみで、仇が身をひそめることも

なく大手を振ってまかり通っている城下へ、
一歩一歩距詰め寄って行くだけだった。

初めて海を見て以来、弥恵は心の奥底でか
すかに蠢く何かを感じていた。それは——あ
えて考えないようにしてきた、死への恐怖だ
ろうか。本懐を遂げねば再興かなわぬ柴田家
の行く末だろうか。あるいは、破談となつた
後、仇討への助力を口実に彼女を手籠めにし
ようとした小島要介への怨嗟ないしは侮蔑だ
つたろうか。

まばらな松林が、密生した雑木の森に替わ
り、さらに半日も歩いて小さな宿場で夜を過
ごした。

道は狭いが、咲川藩と北国街道とをつなぐ
要路だけに旅人の姿が絶えることはない。港
から城下へ向かう海産物の荷駄もたまに見か
けた。秋になると、咲川藩から港へ向かう米
俵を背中に振り分けた馬が長蛇の列を成すの
だと、奎助が見てきたようなことを言う。

ほんとうに見たのかもしれない。奎助は半

月の余も姿を消していることがあった。遠方への使いだったろう。家老職の身が他藩への使いを手駒の中間に託すとは――娘の目から見ても胡散臭い。いや、ここへは来ていなかったはずだと弥恵は思い直した。来ていたら、道のりは短くなっても日数は余計にかかる間道を勧めたりするはずがない。

――道端に十人ほどが立ち止まって、ゆるやかな谷底を眺めているところに行き当たった。谷底には三、四十人が群がっていた。小さな川を堰き止めて、泥を浚っている。子供も十人ばかり交じっていて、こちらは水に置いてきぼりをくらった小魚をたも網で掬っている。

「楽しそうだなあ」

七郎がはずんだ声をあげた。

「五つのときでしたか。私も川浚えを手伝ったことがあります」

弥恵も思い出している。母の実家は大きな庄屋だった。三人目の子は悪阻がきつく、母

は静養をかねて里帰りした。弥恵と七郎も母に連れられて、半年ほどは村の子供たちと一緒に遊んだものだった。そして柴田の家へは、父に連れられて帰った。五歳の幼児は楽しかった記憶を心にとどめ、八歳の少女は悲しみの記憶を心に刻んだのだった。

「茂作、五平！ こっちを手伝え！」

川の上流で大声があがった。

「土手が崩れそうじゃ！」

呼ばれた二人につづいてさらに数人、鋤や鍬を取って駆けつける。そこは、川を堰き止めたまわりを掘り広げて小さな池になっていた。本筋の川を迂回して小さな放水路が切られているが、その一面に水がとどこおって、見る見る膨れていった。

「駄目じゃ！ 皆の衆、川から上がれえ！」

怒号というほどではなく、女子供ものんびりと川底からはなれる。それを待ってから、掘割に取りついていた男たちが、水の膨らんだ根元に鍬をいれた。溜まっていた水が奔流

となつて川に真横から突き当つて飛び散り、川べり近くに残つていた者たちをずぶ濡れにした。わあきやあと、おもしろがつているような甲高い悲鳴。

(む……?)

一直線の鋭い流れ——突き。心の隅で蠢いていた気配が、わずかに鎌首をもたげた。

喉ではなく、幅の広い胸元を狙つたところで……十中十までかわされるだろうが。まっすぐ下がるなら、そのまま体当たり。たとえば自分は斬られても、ぶつかることさえできれば敵も体勢を崩すこと必定。七郎の攻撃までは防げない。が……それくらい、藤原なら瞬時に判断する。

横ざまにかわされて打ち込まれれば……そのときは。足を引きながら右を向く藤原から見れば、弥恵は左から右へ流れている。角度の浅い右袈裟斬りか。その刃をかいぐづつて弥恵がみずから倒れ込んで、右片手で脛を狙つても。届くかどうか。届くとしても跳ばれ

れば、相手が着地するまでにこちらの体勢を立て直すのは無理だ。

胸底の蠢動は、虚しく萎えていった。

二・父と許媚

「鋭！ 鋭！ 鋭！」

七郎が諸肌脱ぎで本身を振っている。陽はまだ西の空にかかっている。少々の気合声を迷惑がられることもなかった。

「ええいつ、やあっ！」

踏み込みながら袈裟に斬り下ろして逆袈裟に斬り上げる。頭の高さで止めようとした切っ先が五寸ほど流れた。七郎は足を引きながら正眼に構えなおして。

「鋭！ 鋭！ 鋭！」

振り下ろす剣は、さすがにぴたりと臍の高さで止まった。

弥恵は縁側に座して、弟の一挙手一投足を見るときも視野に入れていた。

時間さえあれば本身ではなく、もつと重い振り棒で基礎の筋肉を鍛えさせたい。しかし、藤原をかくまっている咲川藩の城下はすでに

半日の里程にあつた。先を急げば本戸が閉じるまでに行き着けただろうが、弥恵はあえて手前の小さな宿場で足を止めた。このまま無策で藤原と対峙したくはなかった。

藤原数馬は咲川藩の重役である高橋輔允の食客として、城下に滞在しているという。逃亡されるおそれは、まず無い。いや、藤原には逃げる理由がなかった。仇討の資格があるのは姉弟だけだった。十人二十人と助太刀に頼れば、すでに名誉の仇討ではなくなる。仮にそれができたところで、そのときこそ高橋某が家来に命じて窮鳥を護り抜こうとするだろう。

現実問題として。助太刀を申し出てくれた者はいなかった。弥恵は弟とふたりきりで、格段の技量を持つあに弟子と対決せねばならないのだった。武門の家に生まれた定め。死は覚悟している。しかし諦めているわけではない。敵は本物の天狗ではない。技量の差は正統の奇策で補えるかもしれない。

正統の奇策——と、師匠の神崎正安は言った。誰もが思いもつかなかった、しかし理に適った工夫という意味だ。

それにしても。ふっと弥恵の想念がうつろった。藤原数馬は、何故、父を斬ったのだろうか。遺骸の傍らに残されていた斬奸状には、父が職分を超えて増沢煙草の流通にまで容喙し、一部の商人に利を独占させ、その者たちから巨額の賄賂を得ていると書かれてあつた。農事方家老の父が、煙草に関してだけとはいえ商人まで統制していたのは、作事方家老の職分を侵している。従来 of 仕置にはなかった利割運上金を煙草株座に課していたのも事実だ。しかし、運上金は賄賂ではない。

その一両たりとも父は私していなかったと、弥恵は断言できた。父が自分の着物を誂えたのは三年前だし、弥恵の嫁入り道具も、五百石の家格が泣くほど質素なものだ。運上金の過半は藩の財政を立て直すのに使われ、残りはずべて新田開発や灌漑事業、産品の開発に

注ぎ込まれていた。

煙草の流通を握っていなければ他藩の商人まで跳梁するところとなり、増沢藩から利益が流出する。作物の囲い込みを計る仲買人も出るだろう。そうなれば、百姓は目先のわずかな手付金で何年も先まで縛られ、結局は商人どもに食い散らされてしまう。

そういった事柄を父は、いずれ藩に仕えることになる七郎に教え諭した。弥恵が傍らで耳を傾けるのをたしなめるどころか、藩政をあずかるのも一家の台所を仕切るのも同じことだと励ましてくれさえしたものだった。

年々借金を重ねている諸藩の中にあつて、増沢藩だけは元本を返済していつている。柴田弥一郎友則の才覚あつてこそと、越権を非難する者も、それを認めないわけにはいかなかった。算盤家老という陰口を、父は褒め言葉だと笑っていたが。家督を継ぐ前には神崎道場の四番札まで登り、目録を授けられたことを知る者は、これは少ない。

では——同じ四番札でも切り紙の上位に当
たる目録を受けたのだから、弥恵よりも父の
ほうが強かったかという、これは違う。今
は門弟の数が当時の四倍、四十人余にもなっ
ている。もし柴田弥一郎が政り事に私情を交
えたことがあったとすれば、それは部下に神
崎古流を奨励したことくらいだったろう。毀
誉褒貶を齒牙にもかけず、新たな仕組を作っ
ても金の有るところからは取り、当面の利
には囚われず無いところへ多額の資を投じる。
この大胆な合理性は、神崎古流の理念に相通
じるものがあつた。神崎正安の薫陶を受けて、
彼の人格が熟成されたともいえる。

それはともかくとして。神崎弥一郎が授か
った目録は、城へ登ろうとする弟子への師匠
からの餞だった。弥恵のほうは、弥一郎が切
り紙で止めさせた。

「嫁の貰い手がなくなるぞ」

目を細めて、父は笑った。

実際には、十六の秋に縁談がまとまった。

相手は作事方家老の小島政衛門重直の跡継ぎである要介重久。二人の家老の反目に業を煮やした主君の肝煎りだった。

婚儀は一年後と決まってから、弥恵は花嫁修業そっちのけで神崎道場に通い詰めた。

弥一郎は黙認したどころか、嫁いでも神崎古流をつづけられるよう柴田の家へ頼んでやろうかとさえ言い出す始末だった。

「けっこうです。わたくしも目録を餞に、以後は夫一筋に仕えます」

やはり父は、目を細めて笑ったものだった。

父が殺された理由は（承服できなくとも）分からぬでもない。弥恵が皆目見当つかないのは――何故に藤原数馬が、という一事だった。

彼が政理事について語るところを、弥恵は見聞した記憶がない。五十俵三人扶持の三男坊とあっては部屋住みの肩身も狭く、婿養子の話もなかなかに難しい。剣名を上げて独自に仕官の道を斬り拓くか、より現実的な道と

しては神崎古流の七代目を継ぐか。彼が神崎道場の天狗に成りおおせたのは天稟もさることながら、確とした目標を持って研鑽に励んだからだろう。

そんな彼がなぜ、神崎道場の後ろ盾ともいふべき人物を暗殺したのか。どうにも腑に落ちない話だった。誰かへの義理の筋か、それとも大金に殺されたのか。

(……………！)

弥恵の眼前を白刃が疾った——と、錯覚したのは一瞬。しかし。

七郎の息が上がりかけている。さきほどから左手の握りが甘い。注意するのは簡単だが、本人が気づいてこそと、黙って眺めていたのだが。折りしも、女中が客を案内して曲がり廊下をこちらへ近づいている。四人連れなら、いちばん手前の広い部屋だろう。白刃が疾つた先には、廊下に膝をついて障子を引き開けようとする女中の側頭部がある——とまで錯覚が広がった瞬間。

「そこまで！」

弥恵の鋭い声に、七郎がぎくつと身体を止めた。

「ひええ……」

女中が腰を抜かして廊下にへたり込んだ。

四人連れの男たちも、七郎と同じように凍りついている。

「驚かせて相済みませぬ」

女中と四人連れとに膝を向けなおして、弥恵は軽く頭を下げた。

「ああ、びっくりした。男のなりをしてらっしゃるだけあって、飛ぶ鳥も目を回しそうな気合ですねえ」

女中は弥恵に皮肉のひとつもぶつけてから、柱を支えに立ち上がった。女中が客を通したのは、弥恵が予想したとおりの部屋だった。

——弥恵の眼前を疾った刃は、超常的な予知によるものではない。二人の動きを重ね合わせれば、七郎の太刀筋の延長線上で女中が動きを止めるだろうことは自明だった。間も

なく七郎の手から真劍がすっぽ抜けるだろうことも、劍術を教えるくらいの者になら容易に予測がついた。そして姉ならば。修行に没入した七郎が、そこへ疲労も加えて、女中たちに気づいていない——太刀筋の向きを変えようとはしないだろうとも、見て取れた。それらすべてが不幸な偶然で一致したときに起こるだろう最悪の事態を、無意識裡に予測したに過ぎなかった。

「疲れているようですね。型稽古は、よしとおきましよう」

弥恵が立ち上がった。

払暁。旅籠屋の裏庭で昨日の七郎と同じ位置に立って、弥恵が素振りを繰り返している。切っ先が尻の谷間を割るほどに振りかぶって、一瞬の静止の後、左足を踏み込みながら無言の気合とともに振り下ろして、ぴたりと水平に止める。相手の肩に物打ちが達する直前から臍の位置で刃先が止まるまでの一瞬に、脇

から指先まで順を追って絞り切られている。刃を引いて一步下がり、元の姿勢に戻って振りかぶると、今度は右足を踏み込んで斬る。何度繰り返しても、切っ先は同じ空間を切り裂いて同じ点で止まった。

筋肉を苛め抜く大きな動きを半刻ほどもつづけてから。弥恵は全身を汗にまみれたまま型稽古に移った。

ただひとりの型稽古。弥恵は受け太刀に藤原数馬の姿を思い描いた。渾身の力――ではなく、相手の思わぬ変化にも備えつつ、筋を切断して戦闘力を奪えるだけの剣勢で斬りかかる。刃筋が正しく立っていれば、そして相手がなんの防禦も取らねば、両掌を絞りながら振りぬく剣は骨の髄まで断ち切るだろう。

しかし藤原数馬は、身を沈めつつ峰に左手を添えて頭上に横たえた刀身で弥恵の一撃を受け流す。弥恵は斜めに滑った太刀の勢いに逆らうことなくみずから身を翻し、その勢いで胴を薙ぎにいった。

ガキン……と、頭の中に刃のぶつかりあう音を聞いた。だけでなく。数馬が左手で抜いた小刀に刃が弾き返される手応えさえ感じていた。『受け流し返し』の型にはない展開だった。仕太刀の刀勢が強ければ、この小刀は押し返されて姿勢が崩れ、受け太刀の不利となる。斬撃は迅くとも体重の軽い弥恵が相手だから成立する受けだった。

実際の果し合いではこのようになるのだろうと、弥恵は想像した。さすが一番札だけのことはある機に臨んで変に応じた型からの逸脱だったが、それを無意識裡に予測した弥恵の力量と天稟もけつして劣っていなかった。決死の、いや必死の覚悟が、常にない高みまで弥恵を引き上げているのかもしれない。しかし。

弥恵は、同じ型を受け太刀で演じてみた。真つ向から振り下ろされる刃筋。身を沈めながら、頭上で斜めに構えた大刀で受け流すと――仕太刀は踏み込んだ勢いをそのままに、

肩から刀身にぶつかってきた。刀が手から弾き飛ばされ、弥恵は押し倒された。その喉を、馬乗りになった敵の切っ先が深々と貫いた。

ひゅうひゅうと喉を鳴らしながら断末魔の痙攣に襲われる弥恵を、薄嗤いを浮かべながら見下ろしている男の顔。それは藤原数馬ではなく、小島要介の顔だった。

小島要介。弥恵にとって彼こそは、藤原数馬よりも憎い男だった。

父の供をしていた小者は浅手で助かったが、夜の闇に紛れた賊の顔は見えていない。しかし斬奸状に藤原数馬の署名があれば、そして直後に当人が逐電したとなれば、下手人を疑う余地もない。それでも弥恵は、藤原数馬が父を斬り殺す現場を目撃したわけではない。憎き仇と頭ではわかっていても、どこか実感に乏しい。

しかし小島要介は――四十九日の法要の日、仇の消息が知れたと弥恵に伝えた。

「いささか話が長くなりますし、万一にも他

人の耳にはいると拙いので」

翌日、弥恵は町外れの出会い茶屋で要介と密会していた。二人を知る者が見れば、じゅうぶんに誤解を招きかねない振る舞いではあった。

要介がもたらした藤原数馬の消息は、先に記したとおりである。要介は（小島家の跡継ぎという立場を利用して）小者の幾人かを諸方へ遣わし、あるいは飛脚に仕事ついでの探索を依頼したりして。藤原数馬が名を変えることもなく、増沢藩の北西で国境くわんがいを接している咲川藩の重臣に庇護されていると突き止めた——と、弥恵に説明した。他聞をはばかるというのは、藤原数馬と咲川藩重臣の高橋某とはまったくの赤の他人であるという点だった。遠戚でもなければ縁戚でもないし、神崎古流を介してのつながりもない。とすれば、両者を引き合わせた者がいるのではないか。

「親父殿と高橋殿とは、国境の炭焼き部落を取り合って喧嘩と仲直りを繰り返してきたそ

うだが——まさか、なあ」

炭焼き部落云々は、作事方家老としての職務ではない。国境を定めるとなれば、これは城代家老の役目である。にもかかわらず小島政衛門が当事者にならざるを得なかったのは、その一帯が藩から預かったおのれの知行地だったからである。小島家の台所にかかわる切実な問題だった。それは高橋家でも同じ事情だったようだ。

たとえば。炭焼き部落は高橋家に譲るかわりに、柴田弥一郎の暗殺に便宜をはかってもらう——とは、あり得ない構図だった。暗殺の黒幕が政敵だったというのは、あまりにありそうな話で、かえって馬鹿馬鹿しい。

煙草株座をめぐる二人の確執はのつぴきならないところまで来ていた。しかし弥恵が小島家に嫁入りすれば、柴田弥一郎としては愛娘を人質に取られたようなものだ。などと人情に絡める以前に。主君の肝煎りで和解したのであるから。すくなくとも煙草株座の運営

には小島政衛門と手を携えて、結果として他藩の商人との取引を幾分かでも認めざるを得なくなる。つまり、小島政衛門が弥恵の父を排除する必要はなくなったのだ。

柴田弥一郎がいなくなれば、小島家が弥恵を嫁に迎える必要もなくなった。心残りなく仇討に出立できるようにと――主君のためごかしの言上をして、小島政衛門は縁談を白紙に戻してしまった。

まさしく掌を返す所業ではあったが、それは当人を含めて些末事に過ぎない。弥恵と七郎にとっての大事は仇討ちであり、藩の政理事においては公儀の目だった。誰が高橋と藤原数馬とを結びつけたかという藩内の問題もさることながら。高橋が藤原数馬の凶行を承知のうで庇護しているのであれば。窮鳥懷に入るといふわけでもあるまい。他藩の重臣が暗殺に絡んでいるとなると、これは国を跨ぐ陰謀である。公儀の知るところとなれば、両藩とも無事にはすまない。

「昨年あたりから咲川煙草とかいうのが売られているそうですから、増沢煙草は文字どおりに煙たい存在なのでしょう」

そういった裏の事情が明るみに出ないうちに、藤原数馬の個人的凶行として事を終わらせねばならない。

「喪が明きましたから、明日にでも仇討免許状は下されるでしょう。すぐに出立されるのでしょうかね」

「そうさせていただきます」

弥恵は両手について、要介に頭を下げた。

「仇に巡り合うまでは何年でも流浪を重ねる覚悟でおりました」

情報網という概念すらない時代。かすかな風聞を頼りに個人で諸国を尋ね歩く。江戸の仇を長崎で討てれば上首尾。仇討ちに出た百人のうち九十九人までは、仇にめぐり会えぬまま年老いて青山に骨を埋ずむか、すこしでも才覚がはたらけば、さつさと刀を捨てるか。どちらにしても家名は断絶する。

それが要介のおかげで、探索の労を経ずして一足飛びに仇と相まみえる運びとなりそうだった。こんなにも早く相手の所在を突き止め得た運の良さと要介の尽力とを、弥恵が疑う理由はなかった。

「できるものなら、俺も助太刀したいところだが——父が破談にした弥恵殿を表立つて庇うのとはばかられる」

小島要介では七郎の半分にも役立たない。ばかりか、足を引つ張られる。数が勝敗を左右する戦ではないのだ。三人でいつせいに斬りかかれば同士討ちになりかねない。いかに連携を密にして闘おうとも、瞬間瞬間は対一の斬り合いになる。味方が斬られてもなお平静に敵と対峙し得るか、弥恵には覚束なかった。けれど要介の言葉に、弥恵は胸が熱くなった。

「いいえ。仇の居所を突き止めてくださいましただけでも、弥恵には過分のご助勢です」
つと要介が身を乗り出して。畳についたま

まになつてゐる弥恵の手に自分の掌を重ねた。

「あ……」

身を起こそうとする弥恵の手首をつかんで、
要介がにじり寄つてきた。

「弥恵殿……」

「いけません。そのような……」

要介に抱きしめられて、弥恵の抵抗は弱々
しかった。もとより、武術に長じた弥恵のこ
と。まったくその気がなければ、掌を重ねら
れたときに振りほどいて、一瞬で立ち上がつ
ていた。

しかし。当人の意思とは関わりなく決めら
れたとはいえ、一度は夫と思い定めた殿方。
今はこうして、父親の目に遠慮しながらも、
八方手を尽くして仇の所在を探り出してくれ
た。弥恵には、ためらいがあつた。

「父の思惑など知つたことか。俺は……そな
たと夫婦になりたい」

同じ家老の職にある両家。ふたりは幼い頃
から顔だけは見知っていたが、歳がはなれて

いれば、一緒に遊ぶどころか言葉を交わした
ことすらない。縁談がまとまってからも変わ
りはなかった。要介が政衛門の名代で年賀の
挨拶に訪れたときも、座敷へ招じ入れられた
要介に、言葉少なに酌をただけだった。武
家の娘としてではなくひとりの女人として、
親が決めた許婿としてではなく要介その人を、
初めて男性として意識したのは、小島家に招
待された観梅の宴のおりだった。

「これからは両家が手を携えて、藩を盛り立
ててゆきましょう」

耳元で囁かれて手を握られた。ただそれだ
けのことだったが、意識して殿方と肌を触れ
合わせたのは初めてだった。瞬間、弥恵はふ
たりきりの世界に引きずり込まれたが。要介
にとっては何ほどの意味もないのだろうと、
すぐに弥恵は思い直したものだ。男に交
じって武術の修業をしていれば、いくらかは
耳年増にもなる。要介ほどの年齢の男が、女
人と肌を重ねていないはずがない。案外と、

そういう悪所で覚えた『手管』というものだったのではないかと、ずっと後になって思い至ったものだった。

そのときとは比べ物にならない勢いで言い寄られて。激しい動悸の中で弥恵は当惑しながらも、心の底には悦びもあった。性欲の対象として見られながら、それを好もしく思う――幾分かは女性に共通の心理であるとしても、それが弥恵の運命を大きく変えていくのだが。それは別の物語となる。

「今こそ、そなたとひとつに……」

いつのまにか弥恵は押し倒されて、要介の手が裾を割ろうとしていた。

「いけませぬ……!」

さすがに厳しい声で制して太腿をきつく閉じ合わせたが、まだ要介を押し返そうとはしなかった。

「わたくしは、あなた様とは夫婦になれませぬ。十中八九は、返り討ちにされるでしょう」

「ならばこそ……」

要介が強い力で腿の付け根に手を差し込んで、指で股間をまさぐった。

「ひ……」

みずからも滅多に素手では触れぬ女褌の合わせ目を生温かな異物で穿たれて、背骨を稲妻のような衝撃が駆けのぼった。耳元に荒い息が吐きかけられる。

「男女の交わりも知らずに死んでよいものか。女の悦びを、この肌に刻むのです」

ためらいも遠慮も一瞬に消し飛んだ。頭の芯がすうっと冷えた。この人は、わたくしが討ち果たされると決めてかかっている。そのうえで、肌がまだ温かいうちにわたくしの身体を食ろうとしているだけなのだ。

「慮外者！」

叫ぶと同時に弥恵は、膝頭で男の股間を蹴り上げた。呻き声を漏らして突っ伏す男の手から、身を翻して逃げた。だけでは怒りがおさまらず、うずくまって悶えている要介の襟首をつかんで引き起こし、あらためて畳の上

に投げつけてやった。

——弥恵が憤然と茶屋を立ち去った後、要介がどのように取り繕うかは、知ったことではなかった。

四十九日の忌が明けたと同日に、七郎は前髪を落とした。その翌日には監察奉行所へ呼び出されて仇討免状を賜った。さらに会葬御礼の挨拶まわりに三日を費やしてから、中間の左助ひとりを供に、留守居を頼んだ叔父の柴田満三郎とわずかな数の小者たちだけに見送られて、姉弟は旅立った。骨壺は墓に収めたが戒名札は、仏壇に祀ったままにしておいた。その日がくるかどうかはともかくとして、父が位牌に眠るのは、本願成就して後のことだ。

目指すは咲川藩。小島要介が出鱈目を告げたのではないかという疑念はあった。しかし弥恵を呼び出すだけの口実ならば、高橋某だの他藩の陰謀だのは不要の話だ。弥恵を騙し

ておのれの物にするだけのつもりなら、たとえば――探りに出した者から報せがあつたが、まだ不確かなので藤原数馬の顔を知っている者をそちらへ向かわせている。などと、弥恵の出立を引き留めるような嘘をつくのではないだろうか。だから九分九厘までは真実だろうと、弥恵は判断している。

それに。もし一切が嘘だったとしても、ほかに辿るあてはない。

三・神崎古流

咲川藩の城下に到着した一行は、町外れの旅籠屋に昼のうちから投宿した。藤原数馬に顔を知られていない杢助が城下へ探りに出て、一刻半ほどで戻ってきた。

消息を尋ねるもなにも、藤原数馬は武家町の一画に、あつかましくも『藤原古流』の看板を掲げていた。十余人の門弟のほとんどは藩士の子息だった。増沢藩を逐電してふた月かそこらで一等地に道場を開き、歴とした武家の弟子を集める。よほどの才覚か後ろ盾がなければ、できる早業ではない。

「困ったことになりましたです。かりに半分のお弟子が助勢するとしても……」

「烏合の衆に何ほどのことができましよう」
弥恵は、ことさらに軽んじるふうはなく、しかし一言で杢助の懸念を否定し去った。実のところは、それほどの自信がない。七郎の

動きを封じて、弥恵をも牽制する。三人も助太刀がいれば、それくらいのことではできる。

弥恵は七郎との連携を諦め、助太刀の動静も視野に入れながら自分よりも強い敵と闘わねばならなくなる。もつとも、数が足手まといになるのも事実。藤原数馬が腕に自信があるならば、ひとりで闘うこともじゅうぶんに考えられた。

「むしろ、好都合です。仮初にも道場主が、こそこそと逃げ出すわけにもいかないでしょう」

高橋某に匿われているというのなら、その恐れはあった。闘えばおのれが勝つ——という自負が、藤原数馬にはあるだろう。しかし彼には同時に、負い目もあるはずだ。正々堂々の振る舞いをしたのであれば、逐電する必要はない。藩にとどまっておのれの正当性を主張し、容れられなければ腹を切る。武士であるかぎり、ほかに道はない。

武士にあるまじき身の処し方をしたという

負い目。そこへ加えるならば——おとうと弟子、それも異性という意識を持つて接した對手（と考えるのは、弥恵の自惚れかもしれないが）に仇として狙われるという負い目。それらが、闘えば勝てる相手に背を見せるという挙動につながったかもしれない。

藤原数馬が道場を持ったのは、この地にとどまる覚悟の表われであろう。

となれば。弥恵たちも正面から挑むばかりである。翌日には姉弟して町奉行所を訪れ、仇討の届出をした。

「仇は増沢藩浪人、藤原数馬……ふうむ」
すでにこの事あるを、奉行所では承知していたらしい。町奉行みずから出座して、取り調べにあたった。

「彼の者は、諸事奉行の高橋様の掛かり人である。一点の齟齬も無きよう取り計らわねばならぬ」

「藤原数馬がどなた様のお世話になっているかは、当方の与かり知らぬこと。馬場町に道

場を開いた藤原数馬が、免許状に記された父の仇と同一人物であることは、当人も隠しておりません。仇討の儀、お許しを賜りたくお願い申し上げます」

数えの十四歳といえば、当節では中学一年生か二年生。その少年が、ここが柴田家の正念場とばかりに、八万石の威光と対峙している。弥恵は斜め後ろに控えて――女人のしやしやり出る場ではないと、分をわきまえている。

「相わかった。しかれども、事は重大ゆえ、つまびらかに吟味した上で沙汰いたす。それまでは軽挙妄動を慎まれよ。妄りに騒ぎを起こさるれば取り締り致さざるを得ぬこと、お心にとどめ置かれるように」

しかつめらしく答える町奉行だったが、厄介事を持ち込んでくれたものだ、顔に書いてあった。苦情の矛先が七郎たちなのか藤原数馬なのかはともかくとして。他藩の者とはいえ、武士と武士の争いである。評定所へ問

題を預けて、そちらで結論が出るまでの時間稼ぎだった。

これからすぐにでも仇と相まみえるものと意気込んでいた七郎は、頭を下げて神妙に承りながら不満たらたらの顔だったが、弥恵は、しばしの命拾いをした思いだった。もちろん、拾った命を猫ババするつもりなど毛頭ない。わずかに与えられた時を命の上に積み上げて……しかし、正統な奇策の目途は皆目立っていなかった。道中、心の奥底に蠢いていたなにかも、今はひっそり閑としていた。

「彼の者が父を闇討ちにした藤原数馬であることは本人が認めているというのに……なにを吟味するのでしょうか」

宿へ戻って。袴をはずして草臥れた単衣に着替えて。とくにするともなくなると、七郎が子供のようなふくれっ面で鬱憤を口にした。

「七郎」

弥恵は七郎の衣服をたたむ手を止めて、き

つい目で弟を見上げた。元服してからは、ふたりきりのときも『七郎殿』と呼ぶようにしていたが、今は意識して呼び捨てた。

「わたくしたちで勝てる相手だと、本気で思っているのですか？」

「いえ……ですが……」

自分をはるかにしのぐ剣達者に言われて、七郎は返す言葉もない。

「天が与えてくださった最後の猶予と思いなさい。はやる気持ちを鎮めて、すこしでも業前を磨きなさい」

「旅に出てこの方、わずかな型稽古しかつてくれないではないですか」

「掛り稽古など無用です」

弥恵が、ぴしりと言った。

「元太刀の力量が違います。姉を相手に掛り稽古をすれば、藤原との闘いではかえって勘が狂います」

一つ紋の小振袖で端座する弥恵の姿が七郎には、旅路の男装よりも武張って見えた。

「真剣では太刀筋の疾さと気迫だけが勝敗を分けます。一刀にて仇を両断するつもりで、千遍でも万遍でも素振りを繰り返さない」

「……わかりました」

七郎は両刀を携えて部屋を出ていった。いかに弟とはいえ、元服を済ませた男を前にして女が着替えるわけにはいかない。

弥恵は七郎の着物を片付けると、みずからも涼しい（そしてみすばらしい）形にあらためた。そうしてふたたび畳に座って。ため息ともつかぬ細い息を長々と吐き出した。

弥恵の言葉に嘘はなかった。七郎は神崎古流の型をひと通りは演じられる。しかし、態勢に応じて無意識に型を使い、それを破られても臨機応変に対応できるという進境には、あまりに遠い。藤原を相手に型を使っても、その型に固有の隙につけ入られるだけだ。それよりは、相手がかわす余裕のないほどの疾さと、受けようのない剣威とを目指して——力押しの修練を積むほうが、まだしもだった。

そして。ここから先は言葉の端にも表わさないよう気を使っていたのだが。格下の弟を相手に稽古をすれば、弥恵の剣技は確実に落ちる。九の腕が八に落ちて四の腕が六に上がったとしても、総合戦力が十三から十四に増すのではない。十対九の戦力差が十対八に広がるだけなのだ。

翌早朝。旅籠屋の裏にある狭い空地で稽古をして、裏庭の井戸で半裸になって汗をぬぐい衣服を替えてから。弥恵は部屋の間で座禅を組んで心気を整えた。無念無想——を、神崎古流は求めない。剣技の工夫に想念を巡らせようと、打ち据えられた悔しさを噛み締めようと、勝手である。帰り道に弟と甘味屋へ寄ろうか儉約しようかと迷ってもかまわなかった。目に映じる光景を遮断して想念を追う。それもまた、没我の境地には違いない。

弥恵の想念は、師匠から最後の教えを受けた日へと遡った。

初七日の翌日。仇討の届出やら元服の仮親頼みやらでばたばたしている七郎の名代として母方の親戚をまわり、最後に神崎道場を訪なった。神崎道場へかようときの弥恵は、男装ではないものの袴を着けて脇差を帯びている。それが今日は、五つ紋の裾さばきを氣遣いながら武器も懷劍だけというのは、どうにも心許ない気分だった。

師匠に会葬御礼の口上を述べて。辞去しがたく、沈黙のうちに時が過ぎる。といっても、障子から差す夕刻の陽が動くほどではなかった。

「斬られに行くのか」

ぽつんと、神崎正安がつぶやいた。

神崎正安、五十七歳。城勤めなどは五十歳が引退の目安だが、どう見てもこの男は壮年の盛りだった。最近はいささか痩せてきたが、それは一年三百五十四日欠かさぬ素振りで若いころの脂肪が削ぎ落とされただけで、筋肉は衰えていない。短めの総髪を後ろへなでつ

けた髪型は、激しい鬪いで髷の元結が切れて髪に視界を遮られない用心だった。

「七郎殿を侍でいさせるには、それしかなからう」

その、精力にあふれた男の声が、無念と諦念とに縁取られている。

「そして、侍として死ぬるか」

「侍を捨てよ——と、おっしゃるのですか。」

柴田の家を捨てよ、と？」

神崎正安は、俗世の名誉に重きを置かない。むしろ軽蔑していた。

弥恵も、昨日までは迷っていたのだった。

七郎は仇討を当然のことと、疑っていない。

仇討を果たさなければ、柴田の家はない。すくなくとも、増沢藩士ではいられなくなる。

しかし、運よく仇を追い詰めたとしても、その先の十にひとつあるかないかの幸運に、ふたりの命を賭けてよいものだろうか。大坂あたりの人中に紛れて、姉弟ひっそりと暮らしてはいけないのだろうか。

否——と、弥恵の中で強く叫ぶものがあつた。柴田の家など、二本差しとまとめて捨てても、七郎の思い入れは別して、弥恵としてはかまわない。けれど、父の無念を晴らさずにはいられない。一所懸命に藩の財政を立て直してきた父を奸臣呼ばわりして斬殺した藤原数馬に、ひと太刀なりとも浴びせねば、父も浮かばれまい。

それは違う——と、諭す声も聞こえてくる。姉弟が命を捨てて、それを父は喜ぶだろうか。よくぞやりましたと、母は褒めてくださるだろうか。

正安が弥恵を見据えて、先の問いにゆつくりと首を横に振った。

「それは人を捨て、おのれを捨てると同じだ」
姉弟の心に、子として父の無念を晴らしたいという思いがいささかでもあるのなら、仇討は当人の尊厳にかかわる問題となる。

闘うすべを知らぬ者なら、恨みを呑み込んで生きる道もあろう。しかし、武士とはいわ

ない、闘う力を持っている者には、その道は選べない。おのれの心を偽ってほんの数十年を生き永らえたとしても、それは自己嫌悪に苛まれつづける生であり、慙愧にまみれた死となろう。

正安は畳の縁に目を落として、もういちど首を横に振った。

「弟子と弟子とが、仇と討手とに分かれて相まみえる。戦国の世では、親子が合戦をした例もある。侍とは……武術とは、所詮そういうものであるうな」

弓矢も剣も使えず組討すらもおぼつかぬ者は、仇を討とうとは端から思いつきもしないだろう。その是非はさて措くとしても。

沈黙が流れる。畳の上で、薄赤い陽が這うように動いていった。

「人ひとりを斬るのは、三年の稽古に匹敵するという」

正安が、またぼつと言葉を置いた。三年の稽古とは、剣技の上達ではない。死生観が

変わり度胸が据わるのだと、正安は言葉を継いだ。

「まずは、正統な奇策を練ってみることかな」

これは二十五の歳に長崎で伝え聞いた話だが、と断わって。正安は、コロンブスの卵の逸話を弥恵に語って聞かせた。

「小太刀を封じるために大刀を捨てて組討に持ち込むのも、正統の奇策ではある」

「……………」

弥恵はうなづいたものの、具体的な工夫がすぐに浮かぶわけもない。西へ逃げたか東へ奔ったかも皆目わからない藤原数馬の消息を追いながら、日月を重ねて研鑽を積むしかない。ひと月後には消息どころか居座った先さえも突き止めることになろうとは知るすべのない弥恵だった。

師匠の教えはこれまでと、弥恵が畳に手をつこうとしたとき。

「気を盗む工夫を忘れるな」

それまでの、闇を探っていたような口ぶり

とは打って変わって、正安が断定的に言った。

「そなたの手の内は知り尽くしていると藤原が慢心すれば、そこに外連のつけ入る隙が生じるやもしれぬ。だが、彼とてもそなたが常と同じに仕掛けてくるとは思わぬはず。それとも、敢えて常と同じに小太刀で相對するか？」

「……まだ、わかりません」

おのれの心に問いながら、弥恵は答えた。が、両手を膝に置いて発した言葉に、迷いはなかった。

「勝つ工夫に卑怯も邪道もないと、常日頃、ご教示賜っております。これを肝に銘じまして、正統な奇策を練りたいと存じます」

——ほうっと大きく息を吐いて、弥恵は眼を開けた。陽の光が部屋に満ちていた。

さて、これからどうしたものか。弥恵も七郎も、これといってすることがなかった。仇を見張る必要もない。藩の重臣の庇護を受けて道場までかまえているのだから、勝てる相

手から逃げ出すはずもない。一日に一度、左助に様子を見に行かせれば、それだけでもじゅうぶんに過ぎる。弥恵自身は、藤原数馬の顔など見たくもない。仇を目の前にすれば心が騒ぐ。自分は暴発などしないだけの分別をそなえているつもりだが、弟はどうか。正月の時はまだまだ子供に見えた七郎が、昨日は役人を相手に堂々と渡り合った。心身ともに急速な成長を見せている。それだけに、不安定な面も垣間見えるのだった。

七郎の姿は、部屋になかった。障子の向こうから気合声が聞こえてくる。左助に勧められて、宿場ごとの名物料理などは味わうものの、部屋は安いところを選んできた。必然、裏庭に面した一階の奥ということになる。

「だいぶん日も高くなりました」

部屋の隅で絵草子を読んでいた左助が、珍しく彼のほうから話しかけてきた。

「お昼がてらに、お嬢様も町へ出てみられては如何でしょう。こんな辛気臭い部屋に座り

込んでちゃ、足に根が生えます」

この十五日の旅のあいだ、食事は日に二回だった。早朝に出立して、巳の刻（午前九時）を過ぎた頃に宿で作ってもらった弁当（たいていは握り飯と香の物）を食べる。そして、日が落ちる前に投宿して、近くの飯屋で夕食をとる。その伝でいけば、そろそろ朝と昼とを兼ねた食事の頃合いだった。

「それもそうですね。七郎殿を呼んできます」
弥恵は気軽に立った。ひとりきりの型稽古では、想念に描いた藤原数馬にさんざん打ち破られ、しかも最後には決まって要介に斬殺される。正統な奇策など、かけらも湧いてこない。気分一新。というのは、半分は無意識裡の言い訳。間近に迫った死を見据えながらひたすら稽古に励む身とはいえ、弥恵も十七歳の乙女。増沢藩をしのぐ城下の賑わいを覗いてみたくなかった。

「町が大きくなればなるほど料理がまずくなるとするのは、どうしたものでしょうかね」

という次第で、旅籠屋を出た正面にある蕎麦屋で、ただ胃の腑を満たしてから。とくに目当てもなく、人が賑わっている方角へ足を向けた。

弥恵がすぐ気づいたのは、豊かさと貧しさどだった。店の数も人通りも、増沢藩城下の数倍。石高以上の差異があつた。さらにやかな帯を締めて、増沢藩では滅多に見られぬ贅沢な簪やら鼈甲櫛で髪を飾った娘も少なくな。い。丁稚のお仕着せも小奇麗で、車曳きまで垢抜けている。その一方で。道行く人の袖を引いて小錢をせびる子供や、ぼろぼろの墨染め衣をまつて店先に立ち、喜捨をもらうまで声高に声明を唱えつづける乞食坊主の姿も、そここで見かけた。現代の言葉でいえば、貧富の格差が大きい。その裏にある経済の歪みを、父の薫陶を受けた弥恵はおぼろに感じ取っていた。